「教える」ということ

代田中・1　谷　泳實

「ボランティア、やったら？」
母は、この言葉と共に学校でもらった一枚のお便りも渡してきた。お便りは、夏休みのボランティアの募集案内だ。この一言が、私の大きな成長へのきっかけとなった。
　私は、あまり気がのらなかったが、母からお便りを受け取った。正直、数十個もあるボランティアの一つ一つを見ていくのも、面倒くさかった。でも、母に言われたのでしかたなく、ボランティアの内容にざっと目を通した。介護や福祉のものが多かった。これらは自分に不向きだなと思って見ているうちに、いつの間にかボランティアをやる気になっていた。そんな中、輝くものが私の目に飛び込んできた。不思議なことに、絶対これをやりたいと思った。それは、外国の人たちに日本語を教える、日本語教室の手伝いをするというボランティアだった。
　私は、人に何かを教えることが好きだ。人に教えることができるくらい、自分はしっかりと理解ができているという感じがしてうれしいからだ。だから、外国の人たちにいろいろな日本語を教えてあげるのは、私にぴったりだと思った。まさに、運命の出会い。その時は優しく教えればいいやと単純な考えでいた。
　ボランティア当日。第一の試練。
「しっかり挨拶するんだよ。」
という母の言葉に背中を押され、日本語教室へと入った。
「こんにちは。」
とはきはきと言った。自分でも驚いた。こんな声が出せるなんて。これで自信がついた。しかし、私には第二の試練があった。何をどうすればよいのかがわからなかったのだ。日本語教室の先生の指示を真剣に聞き、自分なりに先生の言動を見て学んだ。そして気づいた。
「もう絵を見たら名前を言えるんだ。すごいね！」
先生は、褒める言葉を何かができるたびに言われていた。そうか、褒めることでやる気を引き出しているのだ。そう思ったのは、私がそうだからだ。「褒めると伸びる」とよく言うが、まさに褒めるのは大事だとわかった。ボランティアは、その日から始まった。私は、まだひらがなをスムーズに読むことのできない子を教えることになった。私は慣れないことに体が固まっていたが、ひらがなの書かれたカードを使って、自分なりに頑張って教えた。
「あ。り。」
私は発音する時の口の動きが分かりやすいように、ゆっくりと大きな口で言ってみた。少しでも参考になればいいなと思った。全てのカードが終わるまで、丁寧に読むことを心がけて教えた。しかし、普段やらないような動きが続いたので疲れた。
　教えるのは大変だった。でも、私自身にも嬉しいことがあった。それは、次に小学一年くらいで、ひらがなの五十音を勉強している途中の子を担当した時のことだ。その子には、いろいろなイラストが描かれたプリントを使って教えた。イラストの名前をくり返し言っていたのだが、その子はいつも「むしめがね」が言えず、そこで止まってしまっていた。これは絶対に覚えてほしいと思った。なので、根気強く何度も、
「これは、むしめがね、だよ。」
と教えた。その結果、一人で言えるようになった。
「そうだよ。」
私は、言えたことに対して喜びを感じられるような言い方で褒めた。すると、この子の成長は止まらず、文字の多い「ほうれんそう」までも言えてしまったのだ。これには先生も驚かれていた。

「まだ教室に来て二ヶ月しか経っていないのにすごいね。泳實先生に教えてもらえてよかったね。」
と先生に言われた。えっ。いや、確かにまだ習っていないひらがなやカタカナも教えたけど。上手に教えることができて安心した気持ちと、先生に褒められて心が弾けるような喜びでいっぱいだった。その時、誰かの成長って、その人だけが嬉しいんじゃなくて、周りの人も嬉しくなるんだなと思った。
　私は、ボランティアで教える側なのに、いろいろな人と出会い、感じたことで、逆に多くのことを教えてもらった。そして、教えることがもっと好きになった。教えるというのは、その人に合った教え方や、どうしたら楽しみながら印象に残る伝え方ができるかなど、多くのことを考えていくことではないか、と思った。私の学校の先生方もこんなことを考えられていたんだろうな、と思うと、やっぱり尊敬しなきゃと思った。
「先生、毎日ありがとうございます。」
今の自分なら、この言葉に本当の気持ちを込めて言えそうだ。
　一学期の数学の授業が思い出される。先生は、
「この答えになる理由を説明できる人？」
と質問された。数学が得意な私は、すかさず手を挙げた。そして説明をした。しかし、クラスの子からは
「うーん。わかんない。」
という声が聞こえた。私は悔しかった。自分の説明でみんなに理解してもらえると思っていたから。でも、後から原因が分かった。その時の私の説明は、みんなのことを考えず、ただ思いついた言葉を言っているだけのものだった。しかし、今ならみんなが理解できるように説明できる。数学が苦手な子もいることを考えて。
　今回のボランティアを通して、「教える」という言葉の本当の意味や大変さを知ることができた。まずは、大好きないとこに勉強を教えてあげたい。いとこは、小学三年生と四年生で、ちょっと勉強に追いつけていないみたい。だから、少しでも、私の力で助けたいと思っている。

６・９